

船井情報科学振興財団 留学生レポート

2015年6月

澤田 真行

1 生活

Connecticut 州 New Haven にもはや二年となりましたが、最近少しばかり愛着というか慣れというものを感じるようになってまいりました。Yale University, Graduate School of Arts and Science で経済学を専攻している澤田です。

運転も慣れてきてからが一番怖いと言いますしまだ警戒心は保ったままなのですが、それでもいろいろなところに「いつもの場所」が増えてきてだいぶ過ごしやすくなってきたように思います。幸いなことに私はまだ身の危険にさらされたことはないのですが、こういったものは何か狙われるきっかけなり特徴なりがあるのか、同級生が二年間ですでに二度も襲われています。今回は家の前を（おそらく携帯で電話なりをしながら）歩いていたところ、すれ違った男にいきなり後頭部を殴られたとのことでした。幸い大きな怪我はなかったようですが、なんと眼鏡まで盗られたということです。New Haven は他の地域に比べてそこまで治安が悪いというわけではありませんが、変わらず用心して歩きたいと思います。

2 学業

前学期に講義を詰め込みに詰め込んだかいがあつて、今季は比較的一つ一つに集中することができました。あわせて今季から少し違う分野の教授のリサーチアシスタントを勤めさせていただいておりましたが、先日その教授からそのプロジェクトの一部がトップジャーナルとして知られる American Economic Review から好意的なりバイズ要求が来たとの連絡をいただき、コーディングのみの貢献でしたが嬉しく思っています。これを励みに自分の研究にも精を出そうと考えています。

当研究科では二年目までに幾つかの条件を満たした場合、三年目から PhD candid に認定されることとなります。今学期は二年目終了までの条件である経済史系の単位の取得や口頭試験の受験などを行いました。

2.1 アメリカ経済史

経済史系の単位取得を要件に課すプログラムは多くないなかで、Yale 大学は「ヨーロッパ経済史」あるいは「アメリカ経済史」の単位を取得することが要件となっています。経済史、しかもヨーロッパ史あるいはアメリカ史しか選ぶことができず、アジア史はなぜないのだと文句たらたらだったのですが、履修したアメリカ経済史の講義は予想をはるかに超えて興味深いものでした。

半期の講義は大まかな時系列にそってどのように今のアメリカ合衆国が形作られてきたかを主要な論文を紹介する形で行われましたが、どちらかというと脱線した雑談のようなエピソードのほうにアメリカの根底にあるメンタリティの姿形を感じることができました。以下に幾つかのエピソードを紹介します。

未だに慣れないのですが、アメリカの地域名というのは入植時の領土である東海岸地域が基準になっています。十八世紀はジョージア州あたりまでの海岸沿いの地域（フロリダに当たる地域及び西部はスペイン領でした）がアメリカ合衆国の領土であり、その結果南部と言われる地域の境界が思ったほか高かったり、中西部と

言われる地域が全然西部に思えなかったりと未だにじっくりときません。(余談ですが中西部というのはアメリカ人にとってみてもどこからどこまでというのははっきりしないようです。日本人にとっての中部地方周辺の地域区分の感覚にも近いでしょうか。)このようにイギリスからの独立当初からの地域を徐々に拡大してきたわけですが、領土の拡大は外交の結果である一方でそれらの土地を実際に利用可能にするのは開拓者達の手には委ねられていました。ここで興味深いのがこれらの開拓された土地の所有権をどのように定めるかでした。当時の開墾技術は当然人力と家畜に頼るものでしたから、林を切り開き、荒れた土地を耕作可能な土地にするには相当の労力がかかったと言います。(記憶が定かでないのですが、一エーカーを耕作可能地にするのに一家で一ヶ月程度の作業が必要だったということでした。)そこで連邦政府はたとえ不法な土地占拠であるとしてもその土地を開墾し、土地の租税を支払ったものにはその土地の所有権が与えられ、元の所有者はそれらを再入手するためには開墾にかかった費用と肩代りされている租税を支払わなくてはならないという方針を打ち出し開拓を推し進めました。(Homestead 法など)その結果、土地を持っていない野心を持った開拓者達は家畜と道具を買い揃えて次々と西へ挑戦してゆきました。この西部開拓においては実際に開拓に挑戦した人々よりも彼らにスコップを売った商人や開拓費用を貸し付けた金融業者などの方が成功したと言われますが、実際十九世紀から二十世紀初頭までの土地取得数のグラフを見るとその百年の間に四、五度バブルのような拡張ピークが起きては落ち込むというのを繰り返しています。これらの爆発的拡大の理由はその時々によって異なりますが、例えばある時期においては小麦への需要がそのきっかけとなりました。当時水はけの悪い土地ばかりで小麦の耕作に適した水はけの良い乾燥地が求められており、中西部の乾燥地の存在が大々的に宣伝されており、多くの開拓者がそれらの土地を求めて西へ向かいました。しかしながら同時に大量の土地が耕作可能になった結果小麦が供給過多となり、食料価格の暴落から多くの破産者を出しバブルのような土地取得の拡大は一瞬にして崩壊しました。そんなことを二十年、三十年に一度と何度も繰り返す反省のなさ、あるいはよく言えば挑戦を諦めない態度にアメリカの精神のようなものを感じなくもありません。

さらにもう一つ。議会での紛糾からの暴力沙汰というのはアメリカに限らず発生していたようなのですが、アメリカ連邦議会においては特に顕著だったようで、暖炉の火かき棒を持ち出してきて殴りかかるのだ、ナイフを持ち出してきて襲いかかるのだの驚き呆れるほどの荒れようだったようです。特に19世紀半ばには”Caning of Charles Sumner”という上院議員があわや撲殺される事件が記録されています。このようなまさに「力づく」の議会討論が行われていた結果、選出される議員の体格が年々大きくなっていったというエピソードには思わず笑ってしまいました。一方でこれは南北戦争にまで至った奴隷制の廃止をめぐる議論の末であったようで、同時に人種問題の根深さを感じさせるエピソードでもありました。経済史のトピックにおいて奴隷制が効率的であったかどうか(当然ながら倫理的に認められるかどうかとは別の問題です)が長年議論されてきたようなのですが、こちらも掴みかかるほどの騒乱が度々起きていたという話を聞き、この問題に対する感覚の差というものが身にしみる思いでした。

2.2 口頭試験

経済史の単位取得と合わせて、こちらも経済系では比較的レガシーな制度になりつつある口頭試験も二年目の終わりが実施時期となっています。こちらは一年目の終わりに行う筆記試験とは異なり、経済学の基礎知識ではなく、選択したトピックの専門知識を問う形になっています。学生は十程度の科目のリストのうち二つを選択し、各科目の担当教員(基本的には対応する専門科目の担当教員であることが多いです)二名と三十分ほどの口頭試験を行います。現在これを一時帰国中の日本で書いている最中、実はまだ一つ(労働経済学)しか終えておらずもう一つの科目(計量経済学)の試験が戻った後に控えているため休みとはいえず落ち着かない

気分です。

口頭試験では一応リーディングリストを学生が提示して、その中の論文について質問がなされるという形になっているのですが、実態はかなりラフに、担当教員の裁量に任せられた形式になっています。少ないものでは四本程度に絞って提示される科目もあるのですが、労働経済学は五十本程度の論文がズラリとリストに並べられており、その中から教授がその場の気分で何本か選ぶという形式になっていました。結果からいうと労働経済学の試験は無事に合格したのですが、緊張からか力不足かある質問の一つに一切答えられず頭が真っ白になり合格をいただいてからも「再履修で構わないからもう一度受けさせてくれ」という気持ちでしばらくへこんでいました。そうやってへこんでいると通りがかった先輩に「俺も酷いもんだったよ、みんなここで失敗して学ぶのさ」と声をかけられ元気をいただきました。

三年目になるとランチセミナーでの研究計画発表や博論計画書の提出など、今度こそ研究一色の生活になる予定です。この夏は前の所属の指導教官との共著を含め、自分の研究がやっと動き出した実感がありますが、もう一つの口頭試験で今度こそこけないように入念な準備をしていこうと考えています。六月でまだこれから暑くなるにもかかわらず、日本の暑さにばて始めています。皆様変わりなくお過ごしくださいますよう。